

平成29年度 全国学力・学習状況調査における

北九州市立 中尾 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成29年4月18日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思えます。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

(1) 教科に関する調査(国語, 算数)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
<ul style="list-style-type: none">・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容・実生活において不可欠であり、常に活用できるようにになっていることが望ましい知識・技能	<ul style="list-style-type: none">・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

(2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

(1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 算数A・B)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	11.0	74	5.1	57	11.6	77	4.9	44
全国	11.2	75	5.2	58	11.8	79	5.1	46

(2) 本校の学力調査結果の分析

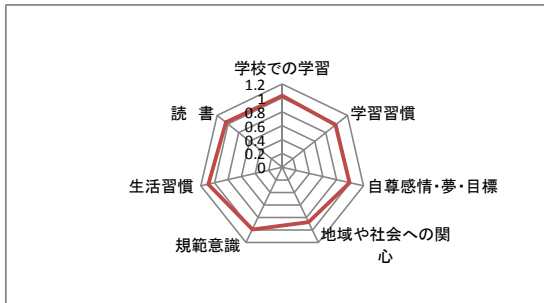
国語A	全体的な傾向や特徴など	・全体的には、全国平均正答率をやや下回っていたが、漢字を正しく書く・読むに関しては大きく上回っていた。読むことの領域が低く、読む能力に課題がある。普段から読むことを習慣化する必要がある。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	学年別漢字配当表に示されている漢字を正しく書く。読む。	
	努力が必要な問題	俳句の情景を捉える。目的に応じて、文章の中から必要な情報を見つけて読む。	

国語B	全体的な傾向や特徴など	・話すこと・聞くことの領域が高く、読むことの領域がやや低い。 ・記述式の問題に対して、全国より高い傾向が見られた。 ・無回答率が全国に比べ、低い。	全国平均正答率との比較 同程度
	よくできた問題	目的や意図に応じて自分の考えを話すこと、構成を考えること。叙述を基に理由を明確に自分の考えをまとめること。	
	努力が必要な問題	文章を読んで、自分の考えを広げたり深めたりするための発言の意図を捉えること。	

算数A	全体的な傾向や特徴など	・数と計算の領域が高く、量と測定の領域に課題がみられる。 ・無回答率は、全問0%だった。	全国平均正答率との比較 同程度
	よくできた問題	数量や図形についての(計算)技能 整数・小数・分数の計算をすること。	
	努力が必要な問題	未知の数量を口を用いて式に表すこと。資料を二次元表に分類整理したり答えをもとめたりすること。	

算数B	全体的な傾向や特徴など	・量と測定、図形の領域が全国より5ポイント以上高い。 ・無回答率が低い。	全国平均正答率との比較 上回っている
	よくできた問題	仮の平均を用いた考えを解釈し、示された数値を基準とした場合の平均の求め方を記述できる。(正答率全国26.11に対し、44.7 無回答率0) 割合を比較するのに適したグラフを選ぶことができる。	
	努力が必要な問題	示された割合を解釈し、基準量と比較量の関係を表している図を判断する。	

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析
全体的に全国比と同じような結果になっている。学習の始めに本時のめあてがきちんと示され、学習の終わりにまとめや振り返りが行われている及び、学級の友達との間で話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると感じている児童が多くいた。今後も学校全体で推進していきたい。家庭学習の習慣や時間がやや少ない。テレビ(スマホ)等のゲームをする時間が60分未満の児童の割合は全国より(18.2point)高い。一方、4時間以上の割合も1.1point高い。地域等の行事に参加していないと考えている児童の割合が高かった。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

<ul style="list-style-type: none"> ・学力の個人差が大きいので、授業時間とは別に、中尾タイムという学力補充のための時間を設けている。(全員参加) 5, 6年生は、火・木を中尾タイムロング(40分)とし、ひまわり学習塾の指導員や低学年の学級担任も参加して、5, 6年の学級担任と共にきめ細かな指導ができるような体制作りをしている。 ・学年によっては、教科(国語)の時間に取り出し指導を行い、少人数にて基礎的な内容の定着を行っている。 ・夏休みには、7日間学習支援を要する児童への個別指導を行った。低学力の児童に対し、パソコン等を使った個別指導も行っている。

② 家庭生活習慣等に関する取組

<p>家庭で宿題をする割合、家庭学習をしている時間がやや少ない。家庭学習の時間を学年×10分+10分以上を推進していく。朝食や起床、就寝時間等、基本的な生活習慣はできているが、さらに家庭での声かけをお願いしている。中学校区で共同で取り組む「あいさつ運動」も行っている。委員会であいさつカード等の取組も行っている。給食時間に食の大切さを知らせる放送や学級指導を行い、食に対する意識を高める。規範教育の講演を行い、個人情報の大切さや、ネットの怖さを繰り返し広報している。</p>
